

街人（まちびと）

..

街人（まちびと）

作・中野浩作

街人（まちびと）

母	ステ タ	ハナ レ	登 場 人 物
---	---------	---------	------------------

どうやら、部屋の一室のようである。
密閉された場所。

ハナレ&ステタ。

ふたりの関係は一見恋人同士に見えるが、そうではない。
親密でもなく、かといって不仲というわけでもない。

ただ、同じ部屋にいる二人組である。
手を挙げるふたり。

ハナレ「ハナレといいます」

ステタ「ステタといいます」

ハナレ「（自分を指し）ハナレはハナレ」

ステタ「（同じく）ステタはステタ」

二人、手を叩く。

二人「お話をしましょう」

互いを指差す。

ステタ「ハナレは24歳でしょう」

ハナレ「ステタは27歳でしょう」

ステタ「ハナレはOLでしょう」

ハナレ「いいえ、ショップ店員です。ステタは派遣社員でしょう」

ステタ「いいえ、プログラマーです」

ハナレ「ならハナレはショップ店員です」

ステタ「ならステタはプログラマーです」

ハナレ「ではハナレはアマチュアグラマーです」

ステタ「（手で示し）ボン、キュッ、ボン」

ハナレ「ではハナレはボンクラです」

ステタ「盆踊りは基本的に夜に踊るものです」

ハナレ「ステタはダンサーですか？」

ステタ「いいえ、サー、ステタと、呼びなさい」

ハナレ「嫌です」

ステタ「ノー（少し間を空け）・・・イエス」

ハナレ「寝ることにしますか？」

ステタ「いいえ、まだ眠りません」

ハナレ「就寝には枕が必要ですね」

ステタ「イエス／ノー枕」

ハナレ「では、ハナレとステタは夫婦でしょうか？」

ステタ「ノー。そこまでお互いを深く知りません」

ハナレ「イエス。そこまでお互いのことを知らない」

ステタ「しかしながら、今日から同居することになりましたので」

ハナレ「それならばある程度お互いのことは認知しておらねばなりません」

ステタ「男女関係でない男女が同じ部屋に住みます」

ハナレ「イエス。そういう時代です」

ステタ「イエス。そういう時代です」

ハナレ「もっと、お互いを知りましょう」

ステタ「同意します」

ハナレ「さしあたり、ハナレとステタは恋人同士ということでよろしいでしょうか？」

二人、手を挙げる。

二人「いいえ。私たちは街人（まちびと）です」

二人「街人は街人らしく生きねばなりません。」

街人の第一歩は互いの情報の交換から始まります。

そのために、街人は会話をします。

会話によって、街人は街人らしさの保持を行います。

会話によって生み出された個人的嗜好の差異の発見、また、他者との差異の認識によって、自己の客体視、そこから導き出される個人特定の部位が街人それぞれの個性となりうるからです。

そして、音声なき会話には個性は宿りません。

Ⅱ（イコール）我々は一見無意味に思えるおしゃべりをしなければならない。

意味の思考はおしゃべりの後に考えればいい。

お話をしなさい」

二人、手を叩く。

二人「固有名詞の確認」

ハナレ「（ステタを指差し）ステタ」

ステタ「（ハナレを指差し）ハナレ」

二人、手を叩く。

二人 「お話をしましょう」

二人 「本日の会話の内容」

二人 「ハナレの嫌いなものについて」

ハナレ 「ハナレは減っていくのが嫌い。」

減っていくことは何事にも変えがたく苦痛を感じる。

なぜ？ なんてなくなっていくの？ なくなっていくのなら、最初からなければいいのに。そんなことさと思う。」

ステタ 「それなら、無くならないものを教えておくれよ」

ハナレ 「（即答）思い出」

ステタ 「（呆れて）思い出こそ、消費されるでしょ？」

ハナレ 「（馬鹿にしたように）それは思い違い」

ステタ 「（深刻そうに）重い違いかな？」

ハナレ 「ええ、はなはなだしほいほどにね」

ステタ 「（軽々しく）花は散るほど軽い」

ハナレ 「軽い症状で済めばいいけど」

ステタ 「風邪薬を買う？」

ハナレ 「いいえ、自らの自己治癒力を信じるの」

ステタ 「自己治癒力はなくならない？」

ハナレ 「（大げさに）体があるうちは」

ステタ 「（必死に）じゃあ、うちにいた方がいい」

ハナレ 「（チャーミングに）でも、このうちは本当にうちなのであろうか？」

ステタ 「廊下があるからね」

ハナレ 「空っぽかもしれないでしょう？」

ステタ 「他も見してみよう」

二人、手を叩く。

二人 「話題がそれた」

二人 「話題を戻す」

二人 「同意」

ステタ 「それなら、無くならないものを教えておくれよ」

ハナレ 「（即答）思い出」

ステタ 「仮定Ⅱ思い出は溜まっていく」

ハナレ 「そう、溜まっていく。だから好き」

ステタ 「消耗に対しての反語」

ハナレ「思い出」

ステタ「（鋭く）それは無理があるでしょ？」

ハナレ「（少し不快に）何が？」

ステタ「消耗の反対語は思い出じゃあない」

ハナレ「では、何？」

ステタ「貯蓄」

ハナレ「（呆れて）貯蓄は思い出の類義語」

ステタ「だったら、類似する部分を教えてよ」

二人、手を叩く。

二人「類似点を、お母さん、と固定する」

ステタ「同意。類似点はお母さん」

ハナレ「お母さんについて語ります」

ステタ「どうぞどうぞ」

ハナレ「（どこか得意げに少女っぽく）お母さんの前にはまち針が幾本も突き刺さっているの。」

ステタ「（少し考え）縫い物の最中なんだね」

ハナレ「何言ってるの？ お母さんの前にはまち針があるの」

ステタ「だから、縫い物をしているんだろう？」

ハナレ「いいえ。お母さんの前にはまち針があるの」

ステタ、手を叩く。

二人「要求。文章列の訂正」

二人「拒否」

ステタ「なんで？」

ハナレ「だって、ちゃんとお母さんの話をしているわ」

ステタ「・・・ああ、そう」

ハナレ「続けても？」

ステタ「・・・どうぞ」

ハナレ「（得意げに）お母さんの前にはまち針が幾本も刺さっているの。その向こうにはロータリーがあって、五本指のビル群がそびえ立っている。100メートル幅の幹線道路がビル群の脇に流れて、そこにはバスも飛行機も、電車も三輪車も走るの。脇道にそれると大変だわ。なんでだかわかる？」

ステタ「（呆れて）さあ」

ハナレ 「お母さんがあるの。三軒先のお母さんからごうとうとお母さんが流れてくるの。

だから、それが大きなお母さんになってしまったというわけなの。お母さんだから、臭くてしょうがないの。

そういえば、お母さんはね先祖代々お母さんでね、でも今は自営でお母さんを開いているの。その隣がお母さん。お母さんなのに商売するのが嫌いだから、早く店を閉めちゃうの。よく小さい頃——」

突然の警報音。

ハッとする二人。

しばしの沈黙。

二人、手を叩く。

二人 「確認」

二人 「お母さんの探求の禁止」

二人 「要素“思い出”の追求の禁止」

二人 「脱却しなさい。脱却しなさい」

ハナレ 「何がダメ？」

ステタ 「ダメだね」

ハナレ 「だって今、ハナレはお母さんの話をしていたのよ？」

ステタ 「どこが？」

ハナレ 「立派に」

ステタ 「全然」

ハナレ 「（膨れる）」

ステタ 「ハナレのお母さんの顔には川でも流れているの？」

ハナレ 「そう」

ステタ 「じゃあ、顔はアスファルトでできているんだね」

ハナレ 「当然」

ステタ 「髪の毛は電信柱で」

ハナレ 「ええ」

ステタ 「まつげは電線だ」

ハナレ 「ええ」

ステタ 「脳みその中にテレビ局があつて、内臓各所に情報を伝達してる」

ハナレ 「そのとおり！」

ステタ 「それは、町（ちょう）だ」

ハナレ 「ちょう？」

ステタ 「ちょうⅡタウン。並列された一人称の集合体。街のなりそこない」

ハナレ 「それはお母さん」

ステタ 「頼むよ。それじゃあ、困るんだよな。ステタのパートナーになったんだ、ハナレは。そのハナレが、未だに町から離れられていないと、ステタも街人になれない」

ハナレ 「でも、ハナレはお母さんの話をしていたの」

ステタ 「わかったわかった。違う話にしよう」

二人、手を叩く。

二人 「戻る」

二人 「ハナレの嫌いなものについて」

ハナレ 「でも、ハナレは・・・」

二人、手を叩く。

二人 「戻る」

二人 「ハナレの嫌いなものについて」

ハナレ 「でも・・・」

ステタ 「嫌いなものについて」

ハナレ、しばし沈黙の後、

ハナレ 「ハナレは減っていくのが嫌い。

減っていくことは何事にも変えがたく苦痛を感じる。

なぜ？　なんでなくなっていくの？　なくなっていくのなら、最初からなければいいのに。そんなことさえ思う。」

ステタ 「無くなっていくものの例は？」

ハナレ 「キンセン（金銭）」

ステタ 「なくならないほうが難かしい」

ハナレ 「ヒビ（日々）」

ステタ 「それは通過するもの。無くなるわけじゃない」

ハナレ 「ジカン（時間）」

ステタ 「金銭と同じ感覚かな？　それなら、やはり無くならない方が難かしい」

正解の音。

二人 「正解。そのようにして対話を繰り返せ」

ステタ 「（どこか得意げに） 続けよう」

ハナレ 「お弁当の仕切りの銀紙」

ステタ 「消耗品の宿命」

ハナレ 「トースト」

ステタ 「食べちゃったんだね」

ハナレ 「洗剤」

ステタ 「（得意げに） 柔軟剤はセットでなくなっていくんだろう？」

ハナレ 「昨日買った卵」

ステタ 「朝食に使ったんだ」

ハナレ 「胡椒」

ステタ 「クシヤミが・・・」

ハナレ 「（遮って） クラスメイト」

ステタ 「（ややムツとしつつ） 友達も消耗品なのかい？それはなんと・・・」

ハナレ 「（また遮る） バスの定期券」

ステタ 「更し・・・」

ハナレ 「時間割」

ステタ 「それは消耗品じゃない」

ハナレ 「潰れたタバコ屋、主人の顔を知らない」

ステタ 「何？」

ハナレ 「あの角にあった」

ステタ 「は？」

ハナレ 「あの角を曲がったところに」

ステタ 「（何事かを察知し） ハナレ、その話題から離れるんだ」

ハナレ 「小学校があって」

ステタ 「やめるんだ」

ハナレ 「校庭には登り棒があった」

ステタ 「おい！！！」

ステタ、ハナレを掴む。

突然、明かりの一部が消える。

二人、手を叩く。

二人 「街人になるには早い」

ステタ 「（何者かに） ちょっとまって！」

二人、手を叩く。

二人 「君たちは街人になるには早い」
ステタ 「僕は違う！」

二人、手を叩く。

二人 「僕？ 違う、ステタはステタだ」
ステタ 「僕は街人だ！」

二人、手を叩く。

二人 「違う、ステタはステタである。ステタはステタでなければならない。僕、などという一人称を用いてはならない。それは民衆に流れ巻き込まれることを示唆する。自己を自己として正しく認識するために、僕は消えなければならぬ。僕、あるいは私、俺、などの一人称の認識は他者との合流を促す。それでは街は作れない。街人にはなれない」
ステタ 「違う！ ぼ——ステタは何も悪くない。ハナレだ！ 街人になるのに、ちょうを忘れていない！」

二人、手を叩く。

二人 「正しい街人になりましょう。正しい街人になりましょう。街人になるには街人であるという認識が必要です。認識は、ルールある対話によつてなされます。ルールなき対話は一人称を生み出します。名前無き一人称は他者への誤解の理解を生み出します。正しく理解をしない。正しい理解をしない。一人称を捨てなさい。他者とは違う自分を認識しなさい。他者と同じになつてはいけません。僕を捨てなさい。俺を捨てなさい。私を捨てなさい。街人に、なりたいたいのなら」

明かり、元に戻る。
ステタ、深く息を吐く。
ハナレ、ぼんやりしている。
やや沈黙。

ステタ 「・・・ねえ」

ハナレ 「ん？」

ステタ 「ハナレはまだ思い出の中にいる」

ハナレ 「・・・そうね」

ステタ 「思い出しちゃダメだ」

ハナレ 「そうね」

ステタ 「街人になれない」

ハナレ 「・・・そうね」

ステタ 「お話をしましょう。今日はハナレが話す日だ」

ハナレ 「（ややあつて）・・・お話をしましょう」

二人、手を叩く。

二人 「ハナレの嫌いなものについて」

ハナレ 「ハナレは減っていくのが嫌い。

減っていくことは何事にも変えがたく苦痛を感じる。

なぜ？ なんてなくなっていくの？ なくなっていくのなら、最初からなけれ

ばいいのに。そんなことさえ——」

母、ハナレを背後から抱きしめる。

ハナレ、じっと動かなくなる。

ステタ 「ハナレ？」

ハナレ 「（ひどく小さな声で）思い出はなくなっていく・・・思い出はなくなっていく・・・

お母さんは消えていく・・・思い出すたびに違う姿になっていく・・・減っていく・・・思い出すお母さんの顔はあんな顔だったかしら・・・？変化は消耗・・・。

お母さんの顔がきれいになっていく・・・こんな顔じゃなかった・・・こんな顔じゃなかったはずなのに」

ステタ 「・・・ねえ」

ハナレ 「（はつきりと）ねえ、お母さんの顔はどんなだった？」

ステタ 「（無表情に）・・・綺麗だった」

ハナレ 「（救われたというふう）に）お母さんは綺麗だったのね」

ステタ 「うん」

ハナレ 「（はつきり）わたしは・・・」

ステタ 「（鋭く）ダメだ」

ハナレ 「私・・・」

ステタ 「（強く）私と言いな」

ハナレ 「（突然早口に）私の町にいたお母さんはどんな顔をしていたかしら・・・？ここに來てから、お母さんの顔が綺麗になっていくのよ。もっと汚かった。もつと汚れていた。ちゃんと整備もされないで、肌はガサガサで、最初は綺麗だったアスファルトもところどころ剥げちゃって」

ステタ 「ハナレ！」

ハナレ 「指先のコンクリートがポロポロと崩れたわ。私、小さい頃にそのコンクリートの下敷きになったことがあって、お母さんったら、鉄骨がむき出しになつてのに大丈夫？大丈夫？って、下水のパイプも一緒にちぎれちゃっているから、私、うんこまみれなのに、大丈夫？大丈夫？って。笑っちゃうでしょ？自分の娘がうんこまみれで、血まみれなのに、必死に大丈夫？大丈夫？って」

ステタ 「それはお母さんじゃないんだ！」

ハナレ 「お母さんの街灯の下でよく本を読んでもらったの。でも、お母さんの古いラジオを使つてたから、おばあさんみたいだね。防犯カメラのレンズがひび割れるから、よく見えないって。でも、それでも読んでって私がせがむから、最後はいつも映画にしろもらったの」

ステタ 「（ハナレに掴みかかる）それは思い出だ！ お母さんと思い込んでいる僕達の思い出だ！」

ハナレ 「僕達？ 違うわ。私の思い出」

ステタ 「違う！ そう思い込んでいるだけだ！ その続きを言ってみろ！」

ハナレ、ステタをまじまじと見つめながら、思い出をくちにする。

ハナレ 「（様子を伺いながら）朝起きると、テーブルの上に」

ステタ 「お母さんが乗っていた」

ハナレ 「（驚くが続ける）今日はトーストにしました、と、可愛く言ってきた」

ステタ 「黄身を潰すと半熟のお母さんが出てきて、」

ハナレ 「私は胡椒をかけてお母さんを食べた」

二人 「時計が8時を指していた。私は遅刻するかもしれないと思って、いそいそお母さんを出た。キラキラと輝くお母さんが青いお母さんの東の方から上っていた。ちようどお母さんがやつてきたので満員なのはわかっていただけ、私はお母さんに飛び乗った。」

ハナレ 「広い校庭のあるお母さん」

ステタ 「木造のお母さん」

二人 「一時間目の国語の時間でお母さんを習った。二時間目の社会の時間でお母さん

を習った。三時間目の算数の時間でお母さんを習った。四時間目の理科の時間でお母さんを習った」

ハナレ 「お弁当のお母さんを好きな子に分けてあげた」

ステタ 「好きな子はどんな顔をしていた？」

ハナレ 「・・・え？」

ステタ 「好きな子はなんて名前だった？」

ハナレ、少し考える。

ハッとして、

二人 「お母さん」

ステタ 「そうだ、お母さんだ」

ハナレ 「五時間目もお母さんを習った。六時間目もお母さんを習った」

ステタ 「帰りにお母さんと手をつないでたきんのお母さんと帰った」

二人 「西のお母さんに赤いお母さんが光り、私たちの体を朱色にしていた。遠くのお母さんにお母さんが三羽飛んでいた。東のお母さんが紺色になっていて、キラキラ光るお母さんを探した。そして、お母さんの待つお母さんに帰った」

ハナレ 「お母さんは待っていたわ」

ステタ 「縫い物をしてね」

ハナレ 「まち針で止めていたのは私の服」

ステタ 「あれは僕のだ」

ハナレ 「いいえ、私の」

ステタ 「いいや、ぼ——」

警報音。

二人 「街人になれなくてもいいのか？ 街人になれなくてもいいのか？

お母さんを思い出すな。町を思い出すな。思い出を思い出すな。その思いでは思い出にあらず。並列された誰かの記憶。

街人になりなさい。街人になりなさい。

街人になりなさい。

母を忘れる！！」

沈黙。

呆然とするハナレ。

ステタには決意の眼差し。

ステタ 「ハナレ」

ハナレ 「（顔を上げる）」

ステタ 「ステタは街人になりたいんだ」

ハナレ 「（顔を伏せる）・・・」

ステタ 「好きな子は男だった？ 女だった？」

ハナレ、顔を上げて何事かを考える。

ハナレ 「（わからない）・・・」

ステタ 「名前は？」

ハナレ 「お母さん」

ステタ 「それは思い出の名前だ！！！」

ハナレ 「（驚く）」

ステタ 「（諭すように） 思い出は減っていくんだよ」

ハナレ 「（絞り出す）・・・ 思い出は溜まっていくの」

ステタ 「そんなもの溜まったら腐る一方だ。腐ったら捨てるしかない。消耗品なんだ」

ハナレ 「思い出は腐らない。私のお母さんは絶対に腐らない」

ステタ 「（冷静に） じゃあ、お弁当の後を思い出してみろよ。好きな子はどんな顔をして

いた？ お弁当のお母さんはどんなだった？ 卵焼きか？ ウインナーか？」

ハナレ 「（悩んで）・・・お母さんは、エビピラフだったわ」

ステタ 「違う！ あのお母さんはグラタンだった！ ハナレの思い出は磨り減って、違うものになってる。自覚しろよ。思い出は変わっていくんだ。それは磨り減っていくのと変わらないんだ」

ハナレ 「（呆然と） コンクリートのお母さんはピカピカで綺麗だったわ」

ステタ 「さっき、ぼろぼろだって言ったばかりだろ？」

ハナレ 「じゃあ、ぼろぼろでピカピカだったわ」

ステタ、呆れる。

ステタ 「ハナレは街人にはなれない」

ハナレ 「同じお母さんを知ってるのに？」

ステタ 「お母さんはお母さんじゃないんだよ」

ハナレ 「同じお母さんと過ごしたのに？ あなたもお母さんだったかもしれないのに？」

ステタ 「うるさい！！！！」

沈黙。

ハナレ、何やらブツブツと呟いている。

ステタ 「もう、忘れるんだ」

ハナレ 「私は忘れない」

ステタ 「(苦々しく) 諦めてくれよ……あの場所には戻れないんだ……」

ハナレ 「なぜ？」

ステタ 「もう、捨てたんだよ」

ハナレ 「(無邪気に) 待っているわ」

ハナレ、母と向き合う。

ハナレ 「お母さんは。お母さんの前にはまち針があるの」

ステタ 「まち針では何も縫えない」

ハナレ 「縫えなくてもいいの。繋いでいれば」

ステタ 「何をつなぐ？」

ハナレ 「私達と」

ステタ 「何？」

ハナレ 「まち」

明かりの一部が消える。

暗い側にハナレ。

ステタ 「(少し笑って) ハナレは、なんでここに來たの？」

ハナレ 「さあ。親離れも経験しとけてお母さんが言うんだもの」

ステタ 「街は辛いね」

ハナレ 「お母さんは優しいわ」

ステタ 「でも、そのお母さんは思い出なんだ」

ハナレ 「私、帰るわ」

ステタ 「帰れないよ」

ハナレ 「お母さんが待っているの。まち針が前に並んでいるわ。たくさんのまち針で私をつなぎ止めてくれるの。それはとってもやさしいのよ？」

ステタ 「知っているよ」

ハナレ 「私のお洋服は背中をまち針で止めていてね」

ステタ 「うん」

ハナレ 「時々、まち針が背中に刺さってちくちくするの」

ステタ 「あのたくさんのまち針は、なんだと思う？」

ハナレ 「でも、」

ステタ 「なんでまち針なんだと思う？」

ハナレ 「まち針は、すぐに取れてしまうの」

ステタ 「その度にお母さんはまち針で止めてくれたね」

ハナレ 「まち針が、チクチクしたわ」

ステタ 「でも、僕の服にはもうまち針はないんだ」

ハナレ 「かわいそう。でもすぐにお母さんが直してくれるわ」

ステタ 「ううん。もう、まち針なんか要らないんだ」

ハナレ 「なんで？」

ステタ 「捨てたから」

何かが弾ける。ハナレ、その場に倒れてしまう。

ステタ、ハナレをジッと見つめる。ややあつて、ハナレ起き上がる。
手を挙げる二人。

ハナレ 「ハナレといいます」

ステタ 「ステタといいます」

ハナレ 「（自分を指し）ハナレはハナレ」

ステタ 「（同じく）ステタはステタ」

二人、手を叩く。

二人 「お話をしましょう」

ステタ 「・・・お話をしよう」

二人、手を叩く。

終